

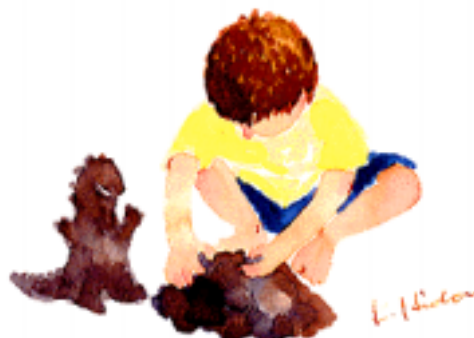
お茶うけ 第28話

手で触れること

私は、1988年6月の日本経済新聞に連載された、日本の具象彫刻を代表する彫刻家佐藤忠良の「私の履歴書」を興味深く読み、それに加筆し出版された「つぶれた帽子」にある多くの彫刻の写真を見たときから、その作品と人柄に引かれていました。

今から4年程前、仙台市にある宮城県美術館の佐藤忠良記念館を訪れて、その作品の数々(約80体の彫刻と20枚の素描)をゆっくりと観てまわりました。写真で知っていた「帽子・夏」や「記録を作った男の顔」(野球のダイエイホークスの王貞治監督の肖像)などの彫刻を実際に身近に観て一層親しみを感じました。

最近、出版されました佐藤忠良著「触ることから始めよう」を読み、私の印象に残ったことを紹介いたします。



彫刻の仕事は、人の手の作業が基本となります。

ブロンズ彫刻を作る手順は、粘土でかたちを作り、それを石膏で原型にとり、その原型をもとに鋳型を作り、その鋳型に溶けたブロンズ(鋳物屋さんではこれを「湯」と呼ぶ)を流し込みます。「湯」が冷えて固まった時に鋳型を外すと、粘土で作ったものと同じかたちのブロンズ像が出来上がります。

ブロンズの立像を作る場合には、まずしっかりした心棒を作り、これに粘土をくっつけてかたちを作り上げますが、かなりの力仕事です。大きなものを作る場合は高い所に登りますし、ほとんど立ちづめの仕事です。また粘土の乾燥を防ぐため夏でもあまり冷房をかけません。粘土のかたちができると石膏で原型を取りますが、石膏の内側に溶けた石膏を入れ、石膏の内面が均一になるように持ち上げて左右に揺するなどします。

この辺りの作業を、以前NHKが日曜美術館で放映した、佐藤忠良の新制作展への出品作品の制作過程を見まして、彫刻を作る作業は素朴で原始的であり、また「汚い」「きつい」「危険」な、いわゆる「3K作業」であることを実感しました。

佐藤忠良が美術大学の彫刻科の学生に話す、もう一組の「3K」があります。それらは「手紙を書け」「恥をかけ」「汗をかけ」です。

例えば、「恥をかけ」について、学生にこう話します。「あなたたちの受けてきた教育は、いかに失敗しないかというものでした。しかし、われわれの芸術の仕事というのは、絶対失敗するものです。失敗の上に足を踏まえてやり直し、築き上げていかなければ、本物にならない」。

「汗をかけ」は「生物としての身体と心をぶち込んでやってみる」と話します。

そして、この2組の「3K」が示すように、身体を使わなければ学ぶことも作ることもできない彫刻科の学生に対して、新入生の時から身体をいじめて、身体で覚え、身体で表現することを学ばせます。毎年入学の日から、いわゆるゲイジユツの時間を与えずに、学生に石工のような作業を強いるのは、「手で触れること」すなわち生物触覚がなによりも大切であると信じているからであると言えます。

私は、このようにして行われる教育に、美術大学を巣立った若者たちが、20数年後に確かな答えを出しているという話を読んで、心をこめた教育の素晴らしさを感じました。

以上

参考文献:

『つぶれた帽子』 佐藤忠良著 日本経済新聞社刊 1988年12月15日発行

『触ることから始めよう』 佐藤忠良著 講談社刊 1997年 3月10日発行